

3 Honey Maid ねくすとっ! よん!

「んっ、んくぅ……あっ、あぁっ、あなた、あなたぁ……!」

あたしの胎内を、這い回る指の感触。

何度も何度も、滑らかに濡れそぼった膣道を奥へ手前へ、動き回る。

「うんっ、もっと、もっと……気持ちいいのお………!」
もっと、たくさん、あなたが欲しい……」

溢れ出る蜜液に塗れ、じゅぶっ、じゅぶっと音を立てて、その指はあたしのナ力を何度も何度も蹂躪するみたいに這い回る。

「あっ! だめ、あなた、もうすべ、あたし……」

あたしの力ラダに電流が走るような感覚。

軽く背筋がびくびくって、震える。

「おねがい、もう少し、もう少しなのぉ……っ!」

一際きゅうっと締まるあたしのナ力。

それは、しっかりと離れないとばかりにその指を締め付ける。

「んくぅ……っ! そう、もっと、激しく……あたしを、

かき回してえっ!」

指の出し入れが激しくなり、部屋の中に粘液をこね回すような水音がさらに激しく響く。

「あぁっ、あひいいいいっ! だめ、いく、いくううっ!」
おねがい、あなたを、あたしにいっぱい、ちょうだい……
…っ!」

あたしは愛する人を呼び、全身をわななかせろ。

「んくううううう~~~~~っ!」

びくん、びくんっ、と、全身が快樂の波にさらわれて歓喜するみたいに、激しく痙攣する。

「あぁ……っ、はぁっ、はぁっ、はぁっ………」

痙攣が落ち着くと、あたしは身体中汗まみれで、大きく肩で息をする。

全力疾走した後のように、切らせた息を、少しずつ落ち着かせていく。

そして、落ち着いてくると共に襲ってくるのはなんとも言えぬ気だるさ。



5 Honey Maid ねくすとっ！ よん！

滲み出た汗が冷たく冷えて、べったりと纏わり付くみたいな感覚と相まって、自分のカラダがものすごく重たく感じる。

そして……たった一人、満たされない空虚な残滓感と、そして……罪悪感。

「まだ……しちゃった……。」「めんなさい、あなた……」

暗闇の中に、愛する彼の顔を思い浮かべる。

「あと、4日か……。お願い、早く、帰ってきて……」

第6話 メイドさんとご主人様の

いちやらぶえっち事情

メイドさんだつてご主人様が

欲しいんです！

「はあ……、昨夜も、またやつちゃったなあ……………」

夜の間に冷えた汗と一緒に、重く、重く纏わり付く感覚は嫌いだ。

「……とりあえず、シャワー浴びよ……………」

重たい身体を無理矢理持ち上げるみたいに、あたしはそのそと身体を起こす。

「はあ……………。でも、このままじゃ、いろいろまずいよね、

あたし……………」

ホントあたし、このままだと…………。

Hしないといられない身体になっちゃってきてるような気がして…………。

こんなので、ホント、大丈夫なのかなあ…………？

「はあ……………」
今日の朝の目覚めも憂鬱…………。
カフダは気持ちよく気怠いのは同じなのに、どうしてこう、憂鬱なんだろう…………。

それは隣に誰もいない肌寒さのせいだけじゃない。

おなかの奥に太いモノが挟まっていた残滓的感觉がない物足りなさ。

そして。

なんとも言えぬ、後ろめたさが、カフダに重くまとわりつく。

「どつしたの、早稀ちゃん。そんなに深刻に眉間に皺寄せちゃって……………」

教室で顔を合わせるなり、雪菜ちゃんから心配されてし

まった。

「あ、う、うん、大丈夫。たいしたことじゃないんだ」

「そうなの？」

首を傾げる雪菜ちゃん。

いかにも全然信じてなさそうなの。

「まあいつか。それより早稀ちゃん、今夜は空いてる？」

「今夜？」

「うん、早稀ちゃんの旦那様、今お留守なんですしょう？」

「うん、そうだけど」

よん！

「早稀ちゃん、今夜予定空いてたら、多分一人じゃないかなって思ってる。久しぶりにうちに夕食食べに来ない？」

「ううん、この2日くらい、元氣なさそうだったし」

雪菜ちゃん、気を遣ってくれたんだ……。

「いいの？」

「いいよ。じつはちょっとうちも旦那様が留守してるんで、わたしと春菜だけなの。今夜一晩、一緒にいてくれると嬉しいんだけど」

雪菜ちゃんの気の遣い方は、氣遣われる側にも優しい。

と同時に、さりげなく断りにくい雰囲気を持っているのが上手。

「こういところで、メイドとしてはまだまだあたし、全然敵わないって思う。」

でも、正直、ずっと独りでいるのは淋しかったから素直に雪菜ちゃんの申し出はありがたかった。

これは、雪菜ちゃんの好意に甘えさせてもらおう。

「わかった。ありがと、雪菜ちゃん」

「じゃあ、今日は一緒に帰ろうね」

「うん」

「ちょうどそこです。」

「きーンかーんかーん。」

「はい、全員席に着いてー」

チャイムの音と共に担任の刻田先生が登場。

「じゃ、また後でね」

「うん」

雪菜ちゃんも自分の席に戻っていった。

本当に、持つべきモノは友達だね。

雪菜ちゃんの背中を見ながら、ふとそんなことを、思った。

その日の放課後。

「それじゃ、一緒に帰ろうか」

そう言う雪菜ちゃんの隣には。

「あれ？ 都ちゃん……」

「うん、私も今夜、一緒にお泊りするところになったの。

よろしくです……」

「もしかして、都ちゃんも、今夜は一人なの？」

「そういつわけじゃないんだけど……せっかくの機会だから、行ってきなさいって、ダンナ様が」

「そうなんだよ。わたしが電話口で説明させてもらって、お許しもらったんだけど、都ちゃんの旦那様、とても優し

いんだよ」

「そうなんだ」

「あはは……恥ずかしいです………」

はにかむ都ちゃん、いつにも増して可愛い。

「そんなわけで、今夜は女の子だけのお話、たっぷりしちやいまじょう」

「そうだね。こういう時でもない、なかなか出来ないもんね」

雪菜ちゃんの言葉に、あたしも頷く。

「ですね……。普段はそれぞれダンナ様から離れることってないですねえ」

「うんうん」

「それじゃ、行こう」

「うん」

あたしたちは3人で教室を出る。

「そう言えば、私は学園の寮に足を踏み入れるの、初めてですね」

9 Honey Maid ねくすとっ！ よん！

「お互い、ご主人様のいる身だから、なかなか招待し合っ
ってわけにもいかないもんね」

「なかなかスケジュールが空いてる日も重ならないしね
……」

「まあ、今日は半ばダンナ様に無理矢理お願いしちゃいま
しただけね、私」

「あははははっ」

あたしたち3人、顔を見合わせて笑う。

「すんなり笑って許してくれる辺り、優しいよね」

「え？ でも、雪菜ちゃんや早稀ちゃんのダンナ様だって、
嫌な顔しないと思うけど……どうなの？」

「そっだねえ……うちの旦那様もいよいよって言ってくれ
そう。春菜の世話も喜んでしてくれると聞いっ」

そこで、雪菜ちゃんも、「早稀ちゃんの方はどうなの？」
というような視線をこちらに向けてる。

「うーん……うちも、特に嫌な顔しなそう。でも……」
「でもっ。」

「でも、やっぱりあんまり頻繁にはそういうこと、あたし
の方が言いたくないかな。できるだけちゃんと、側に付い
てたいから」

「うん、わかるわかる。あんまり旦那様と離れたくないよ
ね」

「私も……今日は特別ですけど、ダンナ様の側でお世話し
たくて一緒になったんだもん」

「そっだねえ……。みんな同じだね」

「あははっ、うんうん。そこそこは変わらないね」

あたしたちは3人、顔を見合わせて笑ってしまった。

「さき、みんなどうぞ？」

雪菜ちゃんの部屋に通されるとすべし。

「あ！ ママー！ おかえりなさいー！」

春菜ちゃんが奥から飛び出してきて、雪菜ちゃんに飛び
ついた。

「だいま、春菜。良い子で留守番してたっ」

「うん！ あ、早稀おねーちゃん、こんにちわ」

「はい、こんにちわ」

べこりと挨拶する春菜ちゃん、かわいいっ

「あれ？ こっちのおねーちゃんはず」

「ああ、春菜は初めてよね。ママのお友達の都ちゃんよ」

「はじめまして。春菜です」

「はい。はじめまして。都っていうの。よろしくね」

「うんー」

元氣にお返事する春菜ちゃんを見て、雪菜ちゃんはこ

「じと頷く。

「よくできました」

「えへへ」

雪菜ちゃんに頭をなでなでされて、春菜ちゃんも満悦。

「すごい……話には聞いてたけど、雪菜ちゃん、ホントに

お母さんしてる……」

都ちゃん、ちょっとびっくりに感じたあたしに囁く。

「普段すごくほにゃってしてるの」。春菜ちゃんの前と
すぐ母親の顔になるよね。やっぱり母親になると変わる
のかな？……って、ちょっと思ってる」

「うん。でも、雪菜ちゃん、なんだかホントに優しいお母
さんって感じだよな」

「ねえねえ二人とも、そんなところで突っ立ってないで、
こっちはどうぞ」

「あ、はい！」

ひそひそ都ちゃんと話したら、雪菜ちゃんに呼ばれて
しまったので、お話中断。

「ね、二人で何を話してたの？」

あたしたちをソファに座らせてから、慣れた手つきで
紅茶を用意しながら、雪菜ちゃんが訊ねる。

「うん、雪菜ちゃんが学園に居る時とすごく違った感じだ
よねって話」

「すごいね、雪菜ちゃん。なんていうか、お母さんだあ……
……って感じで」

「それはそうだよ。だって、お母さんのもの」

「それもそうだね」

ちなみに当の春菜ちゃんは、雪菜ちゃんのすぐ隣で、静かにお絵描きをしている。

そんな二人を見比べていた都ちゃんは、少し羨ましそつ。

「でも、二人すくそつくりだね。雪菜ちゃんのちっちゃい時もあんな感じだったのかな？」

「うん、うちの旦那様にも時々言われるよ。ちっちゃい時のおまえそのまんまだって」

「あ、やっぱりそつなんだね」

都ちゃんがにこにこ笑つ。

「そつ言えば雪菜ちゃんところも、旦那様と幼馴染み同士なんだよね」

「うん。でも、わたしからしたら、ちっちゃい時の旦那様みたいだなんて思つ時もあるよあ？」

「いいなあ……私も、ダンナ様のちっちゃい頃、見たかったなあ」

旦那様とはだいぶ歳が離れている都ちゃんが羨ましそつにそつ言つ。

「写真とかはないの？」

「うん、あるけど……あんまり見る機会ないから。根掘り葉掘り、あれこれ見せてって言つのもなんだしね」

「それもそつか」

「それに、ダンナ様との間に赤ちゃん産まれても、雪菜ちゃんや早稀ちゃんみたいに、彼のちっちゃい頃思い出すなんて事もできないから、ちょっと羨ましいなあ」

「都ちゃんは旦那様ももっと近い歳に生まれたかった感じ。」

「そつだねえ……歳離れてて良いこともないわけじゃないから、その辺は半々かなあ？」

「むしろ、あたしたちの場合は歳離れてた時はどつなつたのか、想像も付かないわ」

「だねえ……。でも、結局、わたしたちそれぞれにピッタリの旦那様が、たまたま歳が近くてすぐ側にいたかどうか

12 ……ってことだから……こればかりは巡り合わせだよ

話え」

第6話
「そつだよねえ……。無い物ねだりしても、しょうがない
か」

「うんうん」

そこで、ちょうどアラームが鳴った。

紅茶の時間かな？

「あ、できたみたいね。はい、みんな、紅茶どうぞ」

ティーポットから3人分のカップにお茶を注ぐ。

「あ、いい匂い……」

春菜ちゃんが鼻をひくひく。

「春菜はまだダメよ。身体に良くないから。もっとおっき
くなってから」

「はあ……」

「春菜はまだ甘い飲み物じゃないとダメでしょう？
はい、リン」ジュースね」

「うんっ！」

春菜ちゃんは自分のマグカップを抱えるように持って、

ごくごくジュースを飲む。

なんか可愛いな。

「あらあら、そんなに一気に飲んじゃって……喉渇い
た？」

「そつじゃないけど……なんだか飲みたくなっちゃった」
「そつなの？ うん……やっぱり、ちょっと緊張しち
ってるのかなあ？」

小首を傾げる春菜ちゃん。

「春菜。いいわよ。奥に行っても」

「いいの？」

「いいわよ。ママはちよつとこちでみんなとお話あるけ
ど、いい？」

「うん、いいよー」

そう言って、春菜ちゃんは奥の部屋へお絵描き途中のス
ケッチブックを抱えて引っ込んでいった。

「こめんね。あの子、ちょっと人見知りしちゃったかも」

「なんか、ごめんね。急に押しかけちゃった形になっちゃったね」

「いいのよ。わたしが誘ったんだし。たぶん、都ちゃん、今日初めてだったから、ちょっと緊張しちゃっただけだと思うから」

「だといけれど……」

「まあ、お食事とかもあるし、一緒に過ごそうちに打ち解けるわよ、きっと。そうだ！あとでみんなで一緒にお風呂入れば良いんじゃないかしら」

「でも……4人だとちょっと狭くない？」

この寮の部屋の作りを知ってるから、確かにうちの寮、彼と2人とかで入る分には十分な広さがあるけど、さすがに4人だとどうなのかな……と、ちょっと引かったのだ。

「ああ、うちは家族3人で入ってもまだ少しゆとりあるくらいだから、大丈夫だよ。ここの寮で各階のうちの側の端が、いちばん広いタイプの部屋だから」

「そうなんだ」

そっか。寮の部屋も、それぞれなのか。

学生寮だから、どこの部屋も同じなのかと思ってたけど、そういうば、ここの学園はメイドとご主人様が一緒にだけじゃなく、子供作っちゃったりするわけだから、当然カップル向けからファミリータイプの部屋とか、それぞれあってもおかしくない訳よね。

「そんなわけだから、あとでみんなで流しっこしましょう」

「なんだか楽しそう。ね、早稀ちゃん」

「うん、そうだね」

都ちゃんの「」「」に釣られて、あたしも思わず頷いた。

「それより、今日は早稀ちゃんのお悩み聞かないと。そのために二人呼んだんだから」

「あ、そうだった」

「あははっ、本人が忘れてどうするのよぉ。しょうがな

第6話 「あはは……」

「そう言えば、早稀ちゃん、ここ何日か、すごく物憂げと
いうか、溜息ばかりでしたね……」

「だから、ちょっとうちの旦那様も留守になるし、これは
わたしたちだけになって話を聞いてあげようと思ったの。
ちょっと今、春菜も向こうに引っ込んでしまったことだし、
今のうちに」

「うん……ありがと……」

見た目は幼さがあって、ちょっと頼りなさげな感じな雪
菜ちゃんだけど、多分あたしたちの間でいちばん気遣いの
できる子だと思う。

やっぱりお母さんは違うなあ……。

雪菜ちゃんの姿を見て、ぼんやりそんなことを思ってい
たあたし。

「ほらほら、早稀ちゃん、話せることなら今のうちに話して
みてよ」

「あ、そうだね。実は………」

雪菜ちゃんに促され、あたしは事の顛末を話した……。